表紙の話

ゆう、ゆわく、ゆわえる、たばねる、くくる、つなぐ、くびる、きびる、からげる…。

「髪をむすぶ」ことを、なんと言いますか。私は、「しばる」。北関東の出身です。

たかが髪の毛、とはいえ、吉田兼好は『徒然草』で「女の髪すぢをよれる綱には、大象もよくつながれ」と語り、『旧約聖書』の登場人物が主役の『サムソンとデリラ』は、恋人のデリラに裏切られたサムソンが、その力の源であるところの髪を切られ、悲劇的な最期を迎えるというお話。女性男性を問わず、髪の毛に力や命が宿るというエピソードは、思いの外、いくつも見つかりました。

夏が近づき、伸びた髪を後ろで一つに結ぶ(しばる)練習をしていた娘は、数日間の悪戦苦闘の末、バッサリとおかっぱにカットするという選択をしました。どうやら彼女には、長い黒髪のパワーは必要ないようです。

むすびのことば(編集後記)

今号は、日本語教育についての原稿が並びました。横山さん、元吉さんは、3 月の学習会での発表の内容を元に活動報告を、黒崎さんはご自身のボランティア活動経験も踏まえての参加記を寄せてくださいました。また、伊奈垣さんは、華僑五世としてご自分が日本語を学んできたという実体験をベースに、日本の学校教育のリアルな一面も語ってくださっています。母国の言葉で書いた名前が受け入れられないという現実に傷つく少年に、だからといってあなたが否定されているわけでは決してないと、肩に手を置いてあげられるような場所の一つに図書館がなれると良いのにと思いました。 (a)

むすびめ2000(にせん) No.95(2016.6)

●ISSN 1883−1230
●年4回発行 ●定価500円
●むすびめの会年間会費(含年間購読料)2,000円 ●入会金 1,000円
●郵便振替 口座番号 00110-9-772880 口座名称 むすびめの会
●発行 むすびめの会(図書館と在住外国人をむすぶ会)
LINCS : LIbrarians' Network for Culturally diverse Society

●住所 〒121-0064 東京都足立区保木間 3-25-8
むすびめの会事務局 平岡ふみを
●電話・Fax 03-3859-7202(平岡)
●事務局メールアドレス musubimenokai2015@gmail.com

●ホームページアドレス(暫定) https://sites.google.com/site/musubimenokainew/
●むすびめの会 ML(メーリングリスト)申込先 lincs-lowner@googlegroups.com
●編集長 瀧澤憲也
●編集 池内美和子 元吉宏 後藤わか子 清水綾子

むすびめ2000(にせん)

ISSN 1883−1230
図書館と日本在住外国人をむすぶ
人・言葉・生活・本・情報の通信
No. 95(2016. 6)

「むすびめの会」(図書館と日本在住外国人をむすぶ) の会報 No95 から、伊奈垣の投稿文を抜粋したものです。

伊奈垣圭映

私だからできること

伊奈垣圭映（梁佳惠）
大阪市立野里小学校講師

昨年のクリスマスに『ちがいがわかる対照表　日本の漢字　中国の漢字』（陣条和榮・イラスト/水山産業出版部）を自費出版した。

この本は、日本の常用漢字を小学校配当の 1,006 字と中学校配当の 1,130 字、合わせて 2,136 字を代表的な音訓読みを付け学年ごとに集めて五十音順に配列している。その一字一字を中国の簡体字と繁体字に対照させ、それぞれ漢語拼音と注音符号も付けた。巻末の音訓索引と拼音・注音音節索引で字典のように引くこともできる。本文は黒と朱の二色刷り。字形の異なる漢字は朱で、同じものは黒で示した。訓読みの送り仮名も朱にしている。

なぜ、このような本を自費出版したのか。

私は、1961 年大阪生まれの華僑五世。小学校低学年は大阪中華学校に通い、小学 3 年生から中学卒業まで神戸中華同文学校で学んだ。その後、府立高校、大学と進んだ。大阪中華学校は台湾系で、繁体字と注音符号で勉強する。そして神戸中華同文学校は大陸系で、簡体字と漢語拼音で勉強する。簡体字は 1950 年代に 4 度改訂公布され、1964 年に『簡化字総表』にまとめられた。しかし、広い国土に多民族で人口が多い上、文化大革命が背景にあり簡体字が普及するにはしばらく時間を要した。私が神戸中華同文学校に転校したのは 1970 年春で、教科書はまだ繁体字のものもあったが、発音記号は 1958 年に『漢語拼音方案』で成立していたので漢語拼音をすでに使っていた。両校は民族学校ではあるが、「日語」（日本の国語）も授業にある。私の三種の漢字に対する苦悩は、この時から始まった。「語文」（中国の国語）のテストで常用漢字を書いてしまい、「日語」のテストで中国漢字を書いてしまう。また、中国語の作文に簡体字と繁体字を混用して、先生に訂正される。実際、先生の方も混乱していてよく間違って板書していたので、無理もない。

大学受験の時、同じ華僑と結婚することを願っている父は、私に大学に行かず料理裁縫と嫁入り修行をするように言った。母方の伯父は医者か薬剤師か、とにかく医療系に進学するよう私を説得しに家まで来た。戦中戦後の辛い時期を日本で過ごした老華僑は、有事の時に生き延びられるのは医療従事者だと体験からそう思っていた。ところが、私はこともあろうに「教育」をめざした。父も伯父も「学費をドブに捨てるようなものだ！」と火をふいた。当時、国籍条項で日本国籍を有しないものは教員採用試験を受けられなかった。大学で教育を専攻するのは先のない選択で、二人が私を愚かだと怒るのも正しい。ただ一人、私を支えてくれたのが母だった。「やりたい勉強をやったらええ。ママがついてるから大丈夫。」私の物心ついた時から、母は亡くなるまで、事あるごとにそう言って私を励まし続けた。いや、母亡き今も私はこの言葉に

支えられている。母は女の子であること、中国人であること、経済的な理由とで初等教育さえ充分に受けられなかった。その思いが私に注がれていた。

大学を卒業して、私は神戸中華同文学校の教員になった。教える側になって、日中の漢字の字形や筆順、画数の違いをさらに意識するようになった。同文学校の一年生は、「語文」で拼音を習ったあと漢字を習う。「日語」では、ひらがなとカタカナのあと漢字を習うので、当然中国語の漢字を先に学習することになる。日本語の漢字を習い始めるころには、中国語の漢字学習はかなり進んでいて、低学年の間はたいてい読みと送りがなを覚えればいいので、ある意味楽である。日本の国語で小学一年生の配当漢字は 80 字だが、同文学校の語文では約 250 字の漢字を読み書きする。「語文」以外の教科でも多くの漢字を認識していく。中国語は虫や花の名前まで全て漢字だけで表記するので、かなりの数の漢字に出合うことになる。中国の小学生は六年間で 3,000 字以上を認識し、そのうち約 2,500 字を書けるように学習する。日本の約三倍の数である。とにかく、漢字を正しく読めて書けないことには、成績が取れないので毎日覚えていくしかない。

近年、日本の学校に転入する外国からの子どもが増えている。私は、公立小学校で彼らの生活支援と日本語指導をしていて、子ども達の漢字学習への戸惑いが自分の子どもの頃の経験と重なった。と同時に、日本の教員の「漢字」への理解が子ども達の戸惑いをさらに大きくしていることに気づいた。現在使われている日本と中国の漢字は、字形が違うものが多くあること、同じ漢字でも意味が全く違うものがあることを指導する側にも理解して欲しいと思った。

中国から転入してきた男の子が、学校の廊下を走って先生に注意された。その子が私に「なんでみんなは廊下を歩いていいのに、先生は僕だけ歩かせてくれないのか！」って訴えてきた。事情を聞くと、彼が廊下を走ったので先生は紙に「走」と書いて両手で大きくバッテンをして見せた。もちろん、表情は険しかった。ところが、「走」は中国語で歩くという意味で、走るは「跑」と書く。それで男の子は自分だけ「歩かせてもらえない。」と不満だった。そのことを両方に説明して納得してもらった。こう言う話は珍しくなく、日本語指導の教室でもよくあること。

また、5 年生で中国からきた子に、高学年だから漢字はたくさん知っているだろうと、先生が「匂う」と書いてジェスチャーもつけて説明したが一向に分かってくれない。と私になぜなんだと、その先生が尋ねてこられた。「匂」は中国では使われていない漢字で、中国語で「におう」は「聞」と書く。私の説明を聞いて、先生は目を丸くしていた。このように身近な漢字でも、意味にちがいがある。これぐらいのことなら双方に説明できる人さえいれば、すぐ解決する話である。

ところが、子どもの自尊心を傷つけたり進路を決めたりしかねないこともある。4 年生の子が、「もう日本語を勉強するのがイヤになった！」と言い出したので、理由を尋ねると「先生が書く僕の名前がちがうから。」と言う。その子の名前に「亮」の字が

あり、中国の漢字では「亮」と書く。プリントに名前を書く度に先生に訂正され、「自分の名前ぐらい正しく書きなさい。」と注意された。「先生はなんで、僕の名前から一画減らすのか。僕はまちがっていないのに･･･。」この時は、私が担任に説明したが、「日本に暮らすなら、日本の漢字で書かせないとダメだ。」と一点張り。それは正論かも知れない。しかし、名は人を表す。小学生といえども、自分の名前にプライドをもっている。それから彼は、暫く日本語どころか勉強をしなくなった。日本人にも名前に旧字を使っている人がいる。解ってやって欲しかった。

小学校中学年以降に転入して来た子は、テストで中国漢字で解答してしまう。本人は正しく書いたつもりなのに、点が取れない。「中国から来たのに、どうして漢字ができないの？」と言う教師の言葉にも、子ども達は心を痛める。

中国から来た3年生、家庭では中国語を話しているので会話はバイリンガルだ。その子に台湾で出版された絵本を担任が見せたが、読めなかった。そこで、母親に読み聞かせてあげてと絵本を手渡したが、断られた。「3年生なら絵本ぐらい読めるはず。母親にも、読み聞かせして母語保持や親子の時間をもって欲しかったのに。」と肩を落とす担任に、私は二つのことを話した。この子は5歳で来日して中国で学校教育を受けていないので中国語の文章が読めないこと、また中国の漢字には簡体字と繁体字があり、中国大陸の若い母親は繁体字が分からないこと。このように、教師であっても日本の学校では、「漢字」に対して多く誤解されている。ほとんどの人が、「中国から伝わった漢字だから･･･」という漠然とした先入観で、「漢字」を捉えている。だが、日本の漢字と中国の漢字は、別の文字と考える方が間違いない。それに合わせて、簡体字と繁体字の同異についても同じことが言える。現に、台湾と中国の若い世代は会話で通じても文書では通じないことがある。空港など多くの人が利用する施設では、両方の文字で書かれている。

前述したように、自分が日本の公立小学校で勤めるとは、私にはありえないと思っていた。ましてや、中国籍中国名のまま担任をすることは絶対ないと確信していた。ところが、2005年春、神戸市立こうべ小学校で私は初めて日本の公立小学校でクラスを担任した。当時の木山校長は戸惑う私に「私をはじめ、周りが支えるから先生らしいクラスづくりをしなさい。」と諭してくださった。実際、木山校長はよく励ましてくださった。日本で生まれ育った五世でありながら、学校現場ではカルチャーショック続きだった。1982年私が大学を卒業した時、国籍条項で教員採用試験を受けられなかった。1997年から私は東大阪市で講師をしていて、その条項が撤廃されたが、私は年齢制限を二歳超えていて受験できなかった。それでもありえないと思っていたことが、現実になることもある。そんな自身の経験から、私は子ども達に「時代は変化する。しっかり勉強して自分の好きなことをやり続けていれば、きっと活躍できる時が来る。」と言っている。漢字学習に嫌気がさしている子には、「小学校の1,006字を習得すれば本が読める。中学校までの2,136字を習得すれば仕事につける。」と話している。

この本の編集で、一番考えたのは「子ども達が手に取りやすく、漢字の字形のちがいを重荷でなく楽しめるようにすること。」そのために、イラストレーターの妹(陣条和榮)に親しみやすいキャラクターでデザインしてもらった。そして、コストがかかってもカバーをつけ、本文は二色刷りにした。大きさも重さも考えてページ数と紙質を決め、子どもがカバンに入れたり手に持ったりしやすいようにした。文字も大きめにし、教科書体と楷書で字形比較に特化したシンプルなものにした。そして、「ちがう漢字」だけでなく「同じ漢字」も示し常用漢字を全て学年順に配列し、音訓と音節索引をつけた。

私は、長年手書きで作ってきた教材を友人に本にするよう勧められるまで、出版を考えもしなかった。それから出版にこぎつけるまで、資金繰りや出版社探しなど多くの課題があった。本書を著すにあたり、あらためて字源を調べた。ごまんとある漢字は一字一字それぞれに歴史があり、発祥の中国だけでなく、日本をはじめ使われている国や地域でその文化に沿って変化している。日本で作られた国字、それが日本から中国へ伝わったものもある。昔は使われていたが現在あまり使われていないもの、簡略化によって統合されたもの、漢字は実に様々な変化を今もし続けている。まさに「漢字は生きている」と痛感した。

そんな中、『語源を知って読みたい漢字』(PHP/正しい日本語研究会 勝間田太郎著 2009年P204)で、“「辞典」というと、私感の入り込む余地のない不偏で中立なものだと思われているふしがあります。しかし、どれも同じ文字を取り扱っているぶん、かえって著者の考え方の違いが明確にあらわれ、個性がよく出ているとさえ言えるかもしれません。”に出合った。そして、さらに“いかにして、正しい文字の成り立ちを解明するか——。現存する中国最古の字典『説文解字』以降でも、すでに二千年近くもその研究が続けられているのです。”と続く。字源の見解にも諸説があり、漢字の奥深さはそれ故なのだと納得したものだった。

2010年、私は二人の子と日本国籍を取得した。ずいぶん考えての決断だった。国籍が変わって6年になるが、私の内面も普段の生活も特に変わっていない。ルーツである中国も生まれ育った日本も私には大切で親しみのある国であり、両方の文化が私の中に共生している。教師として、子ども達に果たすべき私の仕事も国籍によるものではない。

私は神戸中華同文学校と日本の公立学校での職歴があるということで、日本国籍取得のための申請で法務局に三度の面談と、家庭訪問され家中と本棚の写真をまんべんなく撮られた。まるで家宅捜査だと思った。行政書士の先生に話すと、それは珍しいケースだと言われた。面談の質問も回答に窮するものが多かった。例えば、「町内会の活動には、どれぐらいの頻度で参加されていますか？」「日本人の友人と中国人の友人、それぞれ何人ぐらいいますか？割合はどちらが多いですか？」「日本国籍を取ったあと

も、まだ中国に行かれますか？まだ中国の友人と交流されますか？」「どのぐらい日本の社会に同化されていますか？」などなど。

そして、山ほどの申請書類を全て揃えさせて受理しておきながら、「同文学校に勤めていた事が不利になり不許可となる可能性が大きいので、申請を取りやめてもう暫く日本の学校で勤められてから再度申請した方がいいですよ。不許可になると、再申請は難しいです。」と言われ、卒倒しかかった。なぜ同文学校で勤めたことが不利なのか尋ねると、「その間は、日本の社会に貢献していない期間になるからです。」と淡々と答えられた。同文学校には日本の子どもも多く在籍しているし、卒業生も日本社会どころか世界中で活躍している。私たち華僑は「国際都市神戸」の看板を常日頃から飾っているではないか。単純に納税者でもあることを知らないのかと言い返したくなったが、呆れてものが言えなかった。

準備を始めて半年後の 2009 年 9 月末申請し、翌年 6 月官報で日本国籍取得を許可すると告示された。ネット閲覧できる官報には、許可された者の名前(本名)はもちろん住所、生年月日まで掲載される。日本国籍取得後、改名する所以がここに一つある。私も日本国籍を取って変わったと言えば、名前である。最近は中国名のままでも、人名漢字にあるものであれば書類上問題はないが、日本社会にはまだ活きづらさが残る。私は父につけてもらった名前が好きで、ずいぶん迷ったが変えることにした。初めは変な感じだったが、最近やっと慣れてきたと言うより、どちらの名前も良いと思えるようになったので、使い分けている。申請書類に日本国籍取得後に使う名前を書く欄がある。そこに「伊奈垣圭映」と書いたが、娘の大学入学までに国籍取得が間に合わなかった。そこで、先に区役所に通称名を「伊奈垣」に変えに行った。すると、この名前を日常生活で使用している証拠を提出するよう言われた。仕方なく何があればいいですかとたずねたら、「この名前で届いた郵便物があればいい。」と言われたので、友達に差出人になってもらうよう頼んで、自分で自分宛に空封筒を送った。そして、翌日届いた封筒を提出したら、簡単に通称名を変えられた。役所っておもしろい。

国籍が中国であっても日本であっても、私が私であることに変わりはない。たぶん、国籍を変えた人は基本的に、皆同じ考えだと思う。これから先、私も私の子どもも日本で生活していくには、日本国籍を取ることが良いと思えたのでそうしたまでだ。私は、縁あって日本で華僑に生まれ生きている。そして、私だからできる仕事をしたい。微力ながら、この本が日本国内にとどまらず、多くの人の漢字理解の一助になるよう願っている。

追伸：本が出来上がったら、いつも励ましてくださる小林卓さんにお見せしようと思っていた。昨秋、迫田けい子さんから訃報を知らされショックだった。小林さんは、きっと天国でこの投稿も目を細めて読んでくださっていることでしょう。

夕刊)　2016年(平成28年)2月16日　火曜日　4版　8

日中の漢字 違い一目瞭然

芦屋で講師の華僑5世が対照表出版

似ているようで微妙に違う日本と中国の漢字。この認識の差を埋めるため、小学校講師を務める華僑5世の女性が「ちがいがわかる対照表 日本の漢字 中国の漢字」を自費出版した。小中学校で学ぶ常用漢字2136字をすべてカバー。中国人の子どもや日本の教師のほか、中国人観光客を迎える店にも役立つという。（岡西篤志）

芦屋市立岩園小学校講師の伊奈垣圭映（旧名・梁佳慧）さん(54)＝神戸市中央区。神戸中華同文学校（神戸市中央区）をはじめ、中国の子どもが多く通う学校で教壇に立ってきた。

その中で長年気になっていたのが、漢字の違いによる中国の子どもらの困惑。テストで正しい漢字を書いたつもりでも日本の常用漢字と異なるため、間違いとされるケースが相次いでいたという。

漢字は台湾で使われる「繁体字」、現代の中国で使われる「簡体字」、日本の「常用漢字」がある。3種類が同じ形の場合もあれば、それぞれ異なる場合もある。

常用漢字	簡体字	繁体字
花	花	花
食	食	食
骨	骨	骨
着	着	著
図	图	圖

常用漢字、簡体字、繁体字で形の異なるもの

「ハネ」や「点」児童の戸惑いきっかけ

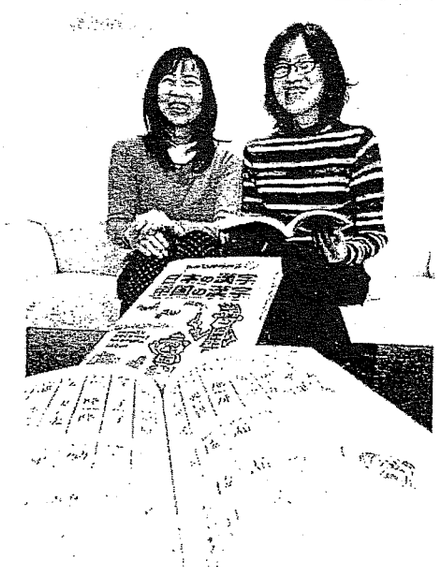
たとえば「戸」の字。簡体字では「户」、繁体字では「戶」となるが、日本のテストでは「戸」以外は間違いとなる。「ハネ」の有無や「点」の角度などの違いについて、多くの教師が「書き方を間違えている」で済ませてしまっているという。

自身も幼少時、漢字の違いに悩まされた伊奈垣さん。5年前、小学校の常用漢字と繁体字、簡体字の対照表を手書きでまとめた。これが他校にも広がり、約30校にコピーを配布。知人から勧められ、神戸市長田区の水山産業出版部に相談し、昨年12月、出版にこぎつけた。

小1～中3の常用漢字を学年ごとに分けて掲載。3種類とも形が同じ場合は黒色、異なる場合はそれぞれ朱色で文字を表現。挿絵は、妹でイラストレーターの陣条和榮さんが担当した。

伊奈垣さんは「中国の子どもも日本人の教師も、違いが分かればスムーズに学習できるはず。いろいろな場面で活用してもらえれば」と話している。

A5判304ページ。2160円。ジュンク堂書店三宮店などで買える。同店☎078・392・1001



日中の漢字の違いが分かる本を出版した伊奈垣圭映さん(右)と妹でイラストを担当した陣条和榮さん＝神戸市中央区(撮影・田中靖浩)

神戸新聞　2016 年（平成 28 年）2 月 16 日火曜日夕刊より